時評

現代短歌のなかで

大野道夫

二月二日、佐佐木由幾先生が亡くなられた。

・細き蛇に生きよ生きよと言ひきかす生きて年々このみどり見よ

『半窓の淡月』（一九八九）

・しなやかに野を跳ぶ豹も見ず終るわれの一生か多摩川の辺に

これらの歌は身びいきではなく良い歌だと思うが、短歌史の中であまり取り上げられたことはない。これは一九三〇年代半ばに作歌を始めたにもかかわらず歌集上梓が遅れたことが一番の理由だと思うが、戦後短歌、前衛短歌、現代短歌という短歌史の流れの中でうまく位置づけられないことも大きいと思う。

その短歌史について、「短歌」では共同研究「前衛短歌とは何だったのか」を連載しており、二月号では座談会「作品としての魅力」をおこなっている。そのなかで前衛短歌の時代には上田三四二、菱川善夫、篠弘という批評家が出現したが、その後が続かなかったことが語られている。確かに『サラダ記念日』（一九八七）が出版された頃から今日まで、すぐれた評論は生まれたが、トータルな短歌史は書かれなかったように思う。これは短歌だけではなく、たとえば社会学でも、マルクスやウエーバーのように、トータルに社会を分析し、未来を予想する学者が出現しない状況がある。

「解説ばかりしてないでお前はどうなんだ？」と言われそうだが、現代は政治、経済はグローバル化する一方で、家族、地域などの「縁」が衰退し、個人個人が液状化していく社会なのではないかと思う。そして、よりどころとなる思想、歴史などの「大きな物語」が失われた中で、前衛短歌以降は、現実の「私」プラスマイナスアルファの〈私〉が、直喩をもちい（俵万智、吉川宏志などには直喩が多い）、大状況ではなく身の回りの小状況を、文学史などに対してではなく身の回りに想定される読者へ向かってうたう、という傾向が生まれているのではないか、と思う。

そして由幾先生の歌などはこの流れから孤立しているので、現代短歌にうまく位置づかないのではないだろうか。

・秋深し菊人形の若武者の横笛いづれも唇に届かず

たとえば座談会で、「ああ、あるある」と読者がうなずく「あるあるネタ」短歌として引用されたこの歌などは、前述の例といえよう。

そしてこの歌などは確かに才気を感じさせる歌だと思うが、現代の短歌がこのような歌だけでよいのか、というとまたうなずき難いのではないだろうか。（ただし同じ「あるあるネタ」短歌でも、斉藤斎藤〈消費税に消費税がかからないのはどうしてだろう。バックします。〉（『渡辺のわたし』）などは、風刺がやや効いていると思う。）

混沌とした現代短歌のなかで現代の短歌を詠むわたしたち、由幾先生の「お勉強なさい」という声が聞こえてきそうである。